

Ⅱ. <研究ノート>

1. アイルランドにおけるスポーツとジェンダーイメージの変化について

坂 なつこ

はじめに

アイルランドにおいては、スポーツは社会的活動として確立された位置を占めている。伝統的な身体文化としてのゲーリックゲームスは、ナショナルアイデンティティの形成にとって重要なだけでなく、地域共同体における社交の場をも担ってきた¹⁾。また、1990年代以降の経済発展は、アイルランド社会に「移民に出る国から移民を受け入れる国」へ変化をもたらした。東欧や中国、アフリカなどからの移民労働者や難民などが流入し、また、海外に出ていたアイルランド人が戻ってくるなど、より多層的、混交的社会を形成しつつあるといえる。そこにおいてスポーツは、社会統合の観点からも重要なものとみなされている²⁾。

また、近年では食生活の変化から、肥満や糖尿病などが広がっており、政府によって、様々なスポーツやエクササイズの推進が目指されている³⁾。

このようなスポーツや身体活動の普及は、先進国においては多かれ少なかれ共有されている考えや活動であるといえる。他方で、アイルランドにおけるスポーツの社会的意味は、ナショナリズムの歴史やナショナルアイデンティティとの関連が深く、多様なスポーツや身体活動の普及においては、社会構造や歴史的変化のなかでスポーツに付与される意味が変化していく過程がみられる。本稿では、その一つのアспектとして、スポーツとジェンダーの関係について着目する。その意味付与の変化の過程は、「ナショナルゲーム」と「グローバルスポーツ」とのせめぎ合いのなかにあるといえ、アイルランドの「女性スポーツ」の受容・

普及の過程、あるいはジェンダー関係の変化をみることで、均質化させる力を持つグローバルスポーツの勢力とは異なる、独自の過程がみえると考えられるからである。

1. ナショナルゲームと排他性

M. Tierney は、GAA (ゲーリックアスレティックアソシエーション)の創設者である M. キューザックが「アイルランドの小作農たちが、カードゲームや飲酒をして仕事が終わった夜や休日をも無駄にしている」と嘆いており、GAA の設立は、そのような若者に「挑戦の機会を与え、活動的になるための合図 (bugle-call) 」となったと述べている⁴⁾。さらに、GAA が、ヨーロッパ大陸 (特にドイツ・フランス) で生じた新しい軍事主義と同時期に設立されたことは、単なる偶然ではなく、これらの国では、18 才以上の全男性への徴兵制が導入されていたが、GAA は、兵役に代わるものを若者に提供し、それは意図せずに、全国的な「健康維持組織」(keep-fit organization) となっていたとする⁵⁾。

Tierney は、GAA が人気を博した別の理由として、19 世紀後半のアイルランド社会において、「多くのスポーツがまとっていたエリート主義と非民主主義の精神に、初めて抵抗する機会を提供した」ことが、GAA の人気を支える理由の一つであったと指摘している⁶⁾。当時、種々のフットボール、クリケット、テニスなどのスポーツは、アイルランドにおいても普及していたが、多くの場合、中・上流階層によって占められていた。サッカーやラ

グビーは、「Garrison Game」（英国軍のゲームの意味）と呼ばれ、GAAは「外国スポーツ」として長く禁止することになるが、Tierneyは、クリケットやテニスも都市部で人気のあったスポーツであるだけでなく、多くのクラブは同様に英国軍のメンバーを受け入れていた⁷⁾。さらに、陸上競技においては、アイルランド・アマチュア陸上協会（AAAI）は、当時のアマチュア規定により、多くのアイルランド人を閉め出していた。「アマチュア」とは、「賞金、公金、入場料のためにレースに参加しない者」であり、「職工、職人、労働者ではない者」と規定されていたからである。当時の、多くの地方の人々（countrymen）は、この3つのカテゴリーに属していたため、AAAIが主催する大会には参加できなかったのであった。GAAの設立は、これらのスポーツ活動から閉め出されていたアイルランド人の多数を占める下層階級や農民に、運動や「准軍事的」訓練の機会を提供したのであり、キューザックらの目的は、当時アイルランドスポーツに存在した階級制度に対する反撃でもあった。もちろん、このような反撃は、キューザックらのアスレティズムにより、アンビバレントなものであったともいえる。だが、アイルランドにおける独立運動の文脈においては、GAAは、「英国によって剥奪されたアイルランドの正統な文化」を体現するものであった。そして、文化の享受という点で、アイルランド人は平等であるべきという考えだったのである。

だが、「すべてのアイルランド人」とはいえ、当時「ゲーリックゲームス」としてGAAにラインナップされたのは、主として男性が行う競技であった。女性が行うハーリングとしてのカモギーは1905年になって協会が設立され、また女性版のゲーリックフットボールは、レディス・フットボールと呼ばれ1974年まで正式に統括組織を持たなかった⁸⁾。その二つとも「GAAファミリー」ではあるが、現在でも正式には別組織である。このようなことから、P. F. McDavittが指摘するように、GAAが表象する「アイリッシュネス」には、「英国人によって去勢されたアイルランド人に、

『正当な』たくましさを、男らしさを取り戻す」と考えられていたのであり、ゲーリックゲームスは、全階級に開かれることを目指されてはいたものの、正しい「アイルランド男性」を形成するためのものであったといえるだろう⁹⁾。以上のように、「ナショナルゲーム」であるゲーリックゲームスがジェンダー化されたものであるという点について、見落とすことはできないだろう。

2. GAAのスポーツ化

Tierneyは、GAA創立100周年に際して、キューザックらが目指した「すべての階級に開かれたGAA」という理念を確認することによって、「偏狭なナショナリズム」を保持するGAAの姿勢を批判している。GAAは、いくつかの「Ban」を維持することによって「反英国的文化」を体現し、「レゾンデートル」を維持しているとするのである¹⁰⁾。

確かに、GAAの表現するナショナルアイデンティティは、現在も続く北アイルランド問題を背景に、強化されてきた側面は否めない。だが、GAAが昨年には125周年を迎える組織となるまでに支持されてきたのは、単に「ナショナリズム」によるものだけではないだろう。

GAAは当初から「地域愛主義（local patriotism）」と呼べるようなものを目指してきた。1888年には、すでに「地方分権」を取り入れ、「地域支部（County Board）」方式を採用したのであった。Tierneyは、このことがとりわけ地方の人々にとって、地元における生活を見直し、自らのカウンティや教区により強い情緒的結びつきをもたらしたのではないかとしている¹¹⁾。そのため、Tierneyは、ゲーリックゲームスは「アイルランド」を体現するスポーツなのであり、GAAは「偏狭なナショナリズム」を廃し、スポーツ組織として自覚するべきだとしている¹²⁾。そのために、GAAが直面せざるを得ない問題は、プロ化と他の国際的スポーツイベントとのメディアにおける競争関係であるという指摘するのである。

Tierney の指摘から 25 年が経過しているが、2007 年にはクロークパークも「外国スポーツ」に解放され、プロ化はされていないが、多くのスポンサーを抱え、グローバル企業と呼べる企業も多数参加している¹³⁾。また、選手会からの「補償制度」の導入の要求も年々厳しくなっている。また GAA の経営戦略は拡大化し、また国内だけではなく、英国においてもテレビ中継は視聴できる。またインターネットラジオによって、世界のどこにいてもリアルタイムで中継を聞くことができる。本年はカモギーの決勝戦の映像がインターネットでライブ配信された。オーストラリアとの国際試合はあまり人気がない模様だが、英国をはじめ、各国にクラブがあり、その活動はグローバル化しているといっていよう。そこにおいて、「アイリッシュネス」は、世界中に広がるアイルランド系移民にとって「ノスタルジア」や「アイデンティティ」としての側面がある一方、意識されずに一つの競技として認識されている場合もある。例えば、スカッシュに似た「ハンドボール」は、アメリカを中心に普及しているが、日本でも「ウォールハンドボール」と呼ばれ、ゲーリックゲームスとの関わりはほとんど言及されていない¹⁴⁾。

さらに国内においては、ハーリング、ゲーリックフットボールのルール変更などに、「スポーツ化」の変化を読み取ることができる¹⁵⁾。2010 年 1 月から、ハーリングの練習及び試合の際のヘルメット着用が義務づけられた。従来は、ジュニア選手などだけであったが、今年からはシニアの選手も着用することになった。これは、頭部への深刻な怪我を防ぐためであるとされている。また、イエローカードやレッドカードの導入、シンビンの採用、全国レベルの試合に出場する審判の講習会やルール試験なども、ゲーム中の暴力行為や怪我を最小限にしようとするためのものである。このような非暴力化、ゲームの組織化は、「スポーツ化」の一部であると捉えられる。「アイルランド的男性性」の表象についても、変化の過程にあるといえるだろうか。

3. ジェンダーイメージの変化

GAA 内部の変化の一方で、ゲーリックゲームスの男性性イメージはまだ強いものであるといえるだろう。昨年ゲーリックゲームスの選手としては初めて、あるハーリング選手がゲイであることを告白した¹⁶⁾。カソリック教会の国家への影響力がまだ強いアイルランドでは、同性愛者の結婚などは公的には認められていない。それに対する一般読者の直後の反応やコメント（インターネットによる）では、ほとんどセンセーショナルなとらえられ方はされていないが、国内メディアにおいて大きく取り上げられている点に、ゲーリックゲームスと男性性との結びつきがみてとることができる。他方、スポーツ選手のカミングアウトが可能となっている環境についてかんがえれば、アイルランド社会における変化をみることもできるといえる。

ゲーリックゲームスは、アイルランド的男性性を象徴するものであったが、近代スポーツそれ自体も、女性学やスポーツ史研究によって、そのジェンダー的側面を明らかにしてきた。さらに、近年では、J.バトラーのパフォーマティビティ論などにより、「生物学的性差」もジェンダー化した概念であることが明らかにされるなど、社会構造とそこにおける関係性によって形成されるジェンダーやセクシュアリティというあり方が、スポーツ研究においてもみられるようになってきている¹⁷⁾。

他方で、スポーツは、そのような研究の成果にもかかわらず、とりわけ日本のマスメディアにおけるスポーツの表象においては、一般的には「男女差」が「可視化」され、そのため「性差の自明性」が疑われない領域であるように思われる。R.コンネルは、ジェンダーを「性と生殖の舞台（リプロダクティブ・アリーナ）をめぐって構築される社会関係の構造であり、諸身体間の生殖上の区別を社会関係に関連づける（この構造に制御された）一連の実践である」と定義づけている¹⁸⁾。コンネルは、ジェンダーが、われわれが「人間の身体を扱う仕方と、その『扱い』が私たちの個人的

生活や集合的命運にもたらす多くの結果」に関わっているとして、ジェンダーのパターンが文化的な文脈によって異なる、すなわち社会的に再生産されるものであるとしている。そうであるならば、スポーツ文化においても、それぞれの社会における構造や関係性のもとに、また歴史的にもジェンダーイメージは異なっているといえる。さらに、このことから、スポーツのジェンダー化は、スポーツそれ自体の特性によってのみ、付与されるわけではないことも読み取れる¹⁹⁾。

K. Liston は、アイルランドにおけるスポーツ（身体活動）について、ジェンダーイメージを分析している²⁰⁾。リストアップされたスポーツ（身体活動）について、アンケートを用いて、回答者が「ハイパーマスキュリン」「マスキュリン」「ニュートラル」「フェミニン」「ハイパーフェミニン」に分けて順位をつけていくというものである。調査によって示された違いを、Liston は次のように分類している。

「ハイパーフェミニン」：コンタクトスポーツではない。優美さが求められる。審美的である。（シンクロナイズドスイミング、カモギー）

「フェミニン」： 忍耐や身体的な鍛錬、高度な技術を比較的必要としない。（ヨガ、エアロビクス、フィギュアスケートなど、6 種目）

「ニュートラル」男女が一緒に行える、特に大きな接触や荒々しさが無い（テニス、卓球、合気道など 37 種目）

「マスキュリン」身体接触、強さ、筋力、精神的な強さ、忍耐、鍛錬の必要、高度な技術（クリケット、サッカー、柔道、ビリヤードなど 14 種目）

「ハイパーマスキュリン」 高いレベルの攻撃性、危険性（レスリング、ラグビー、ボクシングなど 8 種目）

だが、これらの分類は、繰り返すが、競技（実践）それ自体の特徴からのみ導かれるとはいえない。カモギーは、後述するようにコンタクトスポーツであるといえるし、見た目にも優美に見えるシ

ンクロナイズドスイミングでさえ、非常に高度な技術、忍耐を要する訓練、高い身体能力が必要であることは明らかである。また、例えば合気道は日本においては「女性的」と分類されるのではないだろうか。Liston は、このようなイメージを持つジェンダーイデオロギーに注目し、それを「スポーツ資本」という言葉で表現している。

ここで興味深いのは、ハーリングと女性版ハーリングであるカモギーのジェンダーイメージの違いである。カモギーは「ハイパーフェミニン」であると回答した割合は 62%であった（シンクロナイズドスイミングは 74%）。

他方で、同じ競技の男性版であるハーリングについては、61%が「ハイパーマスキュリン」と答えている。これは、例えばボディビルディングが「ハイパーマスキュリン」であるとしたのが 55%、モータースポーツが 64%などと比較してみても、回答者がハーリングに強く男性性をイメージしていることが読み取れる（もっとも高いのは、レスリングで 74%）。しかし、カモギーとハーリングの競技自体のルールに大きな違いはない。だが、例えば、カモギーの場合は、ユニフォームはスカート着用と規定があり、そのイメージがよりフェミニンさを強めていると考えられる²¹⁾。

他方で、ゲーリックフットボールについては、39%が「ニュートラル」であるとしている。しかし、これについては、幾分か注意が必要である。この数字は、「ニュートラル」とされた 37 種類の中でも最も低い数字である（もっとも高いのは水泳で、100%となっている）が、調査の際、「レディス・フットボール」という表記ではなかった可能性があるからである。だが、拙稿「スポーツとジェンダー関係の変化」で検討したように、カモギーとレディス・フットボールの発展の違いに着目すれば、カモギーが「スカート」の着用という外見的な部分だけではなく、歴史的にアイルランドナショナリズムと女性性との結びつきが強い。他方で、レディス・フットボールは、その名前にもかかわらず、フットボールの一つのコードとして普及してきた側面が強調されうる²²⁾。

Liston は、女性のスポーツの位置づけの変化、スポーツの商業化、とりわけ、メディアの役割を重視している。メディアによって表象される「女性らしさ」のイデオロギーがスポーツにジェンダー要素を付与する点を指摘している。だが、そのメディアによる表象も、その社会構造や関係性によって変化しうる。そこには、アイルランド社会の変化との関係によって、様々に変化のパターンを見ることができるだろう。Liston は、アイルランド社会における「スポーツ」の社会的意味が、深く社会構造に埋め込まれている点を強調する。そのために、近代スポーツが持つ「成果主義」や「記録主義」など以上に、「教区、クラブ、チーム、カウンティ、ナショナル、インターナショナルなレベル」にかかわらず、アイデンティティと認識の象徴をもたらすとする²³⁾。この観点からすると、女性スポーツとして認識されるジェンダーイメージも、メディアにおける表象においては、アイデンティティの象徴との葛藤において、そのパターンが変化する余地が多分にあるといえるのではないだろうか。

まとめにかえて：今後の課題

Liston は、歴史的には、メディアによって女性アスリートが「戯画化」されて描かれてきたと指摘する。また、スポーツの商業化、商品化は、メディアで取り上げられるスポーツの種類を制限する方向にあったとする。それにより、女性スポーツのジェンダーイメージは固定され、スポーツ参加が阻害されるとするのである。だが、ここではまだ、メディアの多様化やコンテンツ産業の展開は検討されていない。またアイルランド社会の構造的変化についても言及されていないので、上述したジェンダーイメージがどのような社会関係において生じているのか、また、その後どのように変化しているのかについては、さらなる調査が必要だろう。アイルランドスポーツカウンスルによる調査では、女性のスポーツ参加について、レディス・フットボールやカモギーの競技人口が増加

した結果が明らかになっている²⁴⁾。増加の理由や背景についても、さらに検討する必要があるだろう。また、政府によるスポーツ政策やプロジェクトにおけるテキスト分析も必要であろう。

それでは、ゲーリックゲームスは、「アイリッシュネス」を脱色していくことで、「スポーツ」として生き残っていくのだろうか。既述したようにアイルランド社会の変化は、GAA をより「純粋なスポーツ組織」へと促してきた。だが、ゲーリックゲームスの統合の手段や健康の手段としての注目や、アイルランド社会におけるスポーツの社会的位置づけが、他のグローバルスポーツの受容とどのように異なっているのか、今後検討する必要がある。仮定的ではあるが、そこからは、グローバルスポーツに一元化されない、アイルランド的なスポーツのあり方がみえると考えられる。

【註】

- 1) 拙稿「スポーツナショナリズムーアイルランドにおけるスポーツ」高津勝・尾崎正峰編『越境するスポーツ』創文企画、2006年。
- 2) GAA2010年次報告書によると、2009年4月から、統合大臣 (Minister for Integration) のサポートにより、Inclusion Strategy がスタートしている。また SARI [Sport Against Racism Ireland] は 1997年に設立された NPO で、アイルランド社会における人種差別の撲滅のために活動しており、スポーツを通して「前向きな統合と社会的包摂」を目的としている。毎年9月に主催するサッカー大会は今年で11年目となっている。<http://www.sari.ie/ss/>
- 3) 『SLÁN 2007』(「健康」の意) 調査では、成人の38%が太りすぎ、さらに23%が肥満、10代の子どもについては5人に1人が太りすぎか肥満であるとしている。これは、1999年の調査と比較すると、非常に大きな増加を示していると警告している。http://www.dohc.ie/publications/slan07_report.html。健康・子ども省による「Get Ireland Active」プロジェクト、The National Guidelines on Physical Activity for Ireland, Department of Health and Children, Health Service Executive,

2009. <http://www.getirelandactive.ie/> これらには、スポーツカウンスルのメンバーも関わっている。

4) Mark Tierney, *The Public and Private Image of the GAA- A Centenary Appraisal*, 1984, p. 161.

5) 独立運動のなかにあつて、ゲーリックゲームスを行うことは、政治的集会であるとして英国軍により禁止された。また、メンバーには IRB などとの重複があり、実際には軍事訓練のカモフラージュとしても行われることもあったとされる。Tierney は、その名残が、現在でも All Ireland 大会の決勝戦の際の准軍事的な隊形による選手入場にみられるとしている。

6) Tierney, 同上箇所。

7) 拙稿「ナショナルアイデンティティの多層性」『季刊 民族学』130号、2009年。

8) 拙稿「スポーツにおけるジェンダー関係の変化」『ジェンダーと社会 男性史・軍隊・セクシュアリティ』木本喜美子・貴堂嘉之編、旬報社、2010年。

9) Patrick F. McDevitt, *Muscular Catholicism: Nationalism, Masculinity and Gaelic Team Sports, 1884-1916*, *Gender and History*, vol. 9, no. 2, August.

10) Tierney は、クローク司教が、どのような Ban にも反対であったと述べている。p. 163.

11) 農村地帯においては、小作人の土地所有の問題が独立運動や「ホームルール」の制定を求める重要な焦点であった。そこでは、土地同盟と GAA のメンバーに重なりが見られ、当時の GAA の「地方分権」政策やカソリック教会区と関係については GAA の政治性を考える上で興味深い。

12) 「統一チーム」を持つラグビーと同様であるとしている。Tierney, p.163.

13) 富士フィルム、三菱自動車、トヨタ自動車といった日本企業も含まれている。

14) 日本ウォールハンドボール協会 <http://www.jwha.jp/?cat=8>。日本でより普及している「チーム・ハンドボール」と区別するため「ウォールハンドボール」と呼ばれている。

15) ここにおけるスポーツ化という概念については、N. エリアスの定義によっている。『スポーツと文明

化 興奮の探求』法政大学出版社、1995年。

16) Dónal Óg Cusack, *'Come What May, Penguin Ireland*, 2009.

17) A. ホール『フェミニズム・スポーツ・身体』世界思想社、2001年、飯田貴子／井谷恵子編著『スポーツ・ジェンダー学への招待』明石書店、2004年、平川澄子「スポーツ、ジェンダー、メディア・イメージ」橋本純一編『メディアスポーツ論』世界思想社、2002年など参照。

18) R. コンネル『ジェンダー学の最前線』世界思想社、2008年、22頁。

19) 例えば現在バスケットボールは(とりわけ NBA に代表される)、マッチョな男性性を表象するスポーツと考えられているが、それが開発された当初は、「女性に向けたスポーツ」と考えられていた。それは、フットボールに代わる競技として冬季に室内で行えるようにとルールが整えられたが、その際タックルが禁止されたからである。

20) Katie Liston, *Power at Play-Sport, Gender and Commercialisation, Studies: An Irish Quarterly Review*, vol. 90, No. 359, 2001.

日本におけるジェンダーイメージについて、山本教人は大学生を対象に調査を行っている。山本教人「スポーツのジェンダー・イメージとスポーツの経験」『九州体育・スポーツ学研究』23巻2号、2009年。

21) *The Irish Times* のスポーツ記者でありカモギー指導者でもある Tom Humphries は、カモギーの人气が低迷していることに対して、活性化への提案をしているが、その中の一つに「スカートから選手を解放し、普通のスポーツウーマンとおなじようにパンツとすることの自由」をあげている。*The Irish Times*, Sep 13, 2010.

22) 「レディス・フットボール」という名前の変更について検討した際に、選手たちからも特に変更の必要がないという意見が強く、そのまま残されたとされている。

23) Liston, p.254.

24) *Irish Sport Monitor*, Irish Sport Council, 2008.